連載・イベント

ふるさと Something NEWS

第⑬回

地方や地域の元気を育むICT
――サイモンズ・ポイントカードの事例

一般社団法人 洸楓座
一般社団法人efco.jp　代表理事　佐藤 建吉

▼地域とは?

本屋の立ち読みで、ある本に「地域とは何か?」という問いかけを得た。地域は、確かに対象があいまいな用語であるが、それゆえに多用されている。そもそも、ある言葉に定義をして、その範疇だけに限定したら、広がりが乏しい。日本は海外から多くの文化や情報を得て発展してきた。外国語は外来語の日本語として解釈し、すぐに同化させることが得意である。

コンプライアンスやアカウンタビリティは、その例である。特に、「アカウンタビリティ」は、「説明責任」と言われ、解釈され、不祥事のときに、後付けで謝罪し、ストロボの光を浴びることのようになっている。極端に言うと、言い訳の記者会見をすることのように、理解されている向きもある。しかし、原語の「アカウンタビリティ」は、accountabilityであり、会計部門の用語であり、「業務を正しく記帳や会計処理をして疑義のない説明や報告すること、問題が起きないようにすること」である。事後ではなく事前に処す責任こそが原意である。いまでは真逆の意味に解釈されることが多い。

同様に多用される言葉が、「システム」である。これを日本語に訳し、「系統」とすると対象範囲が狭められ、システムのもつ魔力が霧消する。「エネルギー」は「エナジー」ということもあるが、日本語の解釈には至っていない。中国では、エネルギーを「能源」というが、これには妙味がある。

「地域」は、日本語であるが、解釈自由で十分に魔界で、魅力ある対象であり、好都合な用語でもある。

「いすみ鉄道前社長 鳥塚亮の地域を元気にするブログ」から引用

▼地域を元気にする

地域を元気にすることには、だれも異論を持たないだろう。だが、どうやって? と問われると、いろいろのやり方があるはずだが、なかなか答えを見出せない。「地域活性化」や「地域創生(創成)」の取り組み。霞が関から見れば、「地方創生」となる。

この言い慣わされた言葉に、変化を与えるために筆者は、「ふるさと快活」という言葉をつくり

いすみ鉄道および小湊鐵道の上総中野駅

リリーフとして当てている。「快活」＝「快適生活」である。

冒頭の本は、交通や技術や経済や政治などに基づく「ヒト・モノ・カネ」への関わりが変わったから過疎化すると説く。「快適」に重心を置くとそうかもしれない。

もう一つの「生活」は、Wikiによれば、広辞苑を引用し「生存して活動すること、生きながらえること」であるという。なんと、成長観の無い説明であろうか。筆者流では、「活き活き生きる」が生活である。より活き活きさ、つまりは年代で「生活の旬」が変わるのは確かである。

人(人々)の存在が、村や町、そして都市をつくる。そこには、暮らしがあり、生活がある。どの「地域」も健康で元気であることが、「快活」となる。

「ふるさと」も、年代とともに変わる。地域を元気する「ふるさと能活のシステム」を紹介しよう。

▼「サイモンズ・カード」

千葉県の房総半島に、第3セクターのローカル鉄道のいすみ鉄道がある。民間から登用された前社長の鳥塚亮氏は、独特の取り組み(事業)で、「いすみ鉄道」の名前を世間に広めた。過疎化の進む房総の田舎・山里に、鉄道利用者だけでなく観光客が足を運ぶきっかけをつくった立役者である。

鳥塚氏が社長の時代、筆者は国土交通省のコミュニティ創生支援モデル事業の「房総横断鉄道沿線のエコミュージアム環境整備」で、本紙でも紹介したローカル鉄道応援酒『鐵の道』の元祖をリリースした(第837号、2017年7月24日発行11面を参照)。もう一つ、鳥塚氏の時代、ポイントカードシステムである「サイモンズ・カード」も新規導入した。

「サイモンズ・ポイントカード」は、地方や地域を応援する理念に基づいた新しいポイントカードシステムである。ポイントカードは、店舗の売上増や顧客を固定化するなどのために日常化している。財布やバッグは、ポイントカードで膨れている。

サイモンズ・ポイントシステムは、持続可能な活性化された地域社会を実現するためのポイントカードシステムと、HPにある。また、カード会員、加盟店、企業・団体、地域社会が支えあい、持続可能な共生ネットワークを構築できるシステムともある。ほかのポイントカードとの違いの一つに、ポイントの失効ポイントを集約合算し、ある地域に寄付されることである。

例えば、北海道の鷹栖町応援団の会員証「たかすサポーターズカード」は、サイモンズ・カードを採用しており、町内ばかりでなく全国のサイモンズ・カードの加盟店でポイントを貯めることができる。全国の会員の失効したポイントは合算され、鷹栖町にも寄付される。

鷹栖町では、それを予算として絵本・大型絵本・紙芝居などを選定し、平成23年からこれまで1584冊を購入したという。絵本は、町内の保育園や子育て支援センターで活用されている。その絵本を手にした当時5歳の幼児も今では中学生になっている。子育てや教育は、成長や広がりのキーワードである。

▼「快活」の広がり

このカードシステムは、鷹栖町の住民だけではなく、広域に、全国につなぐことができる。「ふるさと納税」という返礼品で加熱した制度があるが、サイモンズのカードシステムでは、全国の自治体との連携が進められている。

鷹栖町応援団の例のように、鷹栖町が故郷の人、あるいは鷹栖町に縁ができ「心のふるさと」と思う人も、リモートで一つになれる。こうした動きは、海外、世界に拡大できる。

インターネット、クレジットカード、さらに携帯電話などをツールとして新規に登場する電子決済システムは、収益の独占や差別化ばかりでなく、公共や共生の制度にも適用できる。世界の人々が「快活」＝「快適生活」に暮らすことに、ICTのシステムは、貢献できるかもしれない。